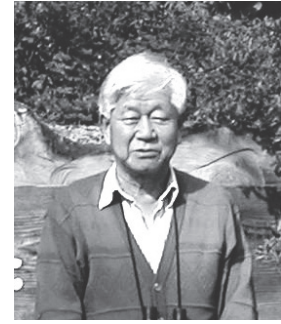


日本鳥学会 100 周年によせて

橘川次郎 (クイーンズランド大学生物科学部門名誉教授)
Jiro Kikkawa, AM, DSc (Professor Emeritus, School of Biological Sciences,
The University of Queensland)



この度日本鳥学会は創立 100 周年を迎えられ心からお慶び申し上げます。

振り返ってみますと、日本の鳥学が発足した当時、世界の鳥学はまだ伝統的な標本集めと外部形態の詳細な測定に基づいた分類学の域を出ていなかったと思います。日本でも鳥学者はみな標本を集め特定のグループの分類、特に亜種の記載とその分布に関して微細で正確な記載を行っていました。学会は日本鳥類目録の編纂をその使命としてとりあげ、初版は創立 10 周年を記念して 1922 年に刊行されています。それ以来目録は代々の編集委員会によって改訂され 2000 年には第 6 版が出版されました。この出版物は国際的にもその高い水準が認められ、権威あるものとして扱われています。戦火を免れたコレクションには幾多のタイプ標本も含まれていましたが、現在最も大きいものとしては山階鳥類研究所で約 7 万点の鳥類標本が保管されています。日本鳥学会は東京渋谷にあった山階鳥研で 1947 年から例会を開くことで戦後の復活を計りました。その頃発表された鳥研の画期

的な研究には山階芳麿氏の染色体によるキジ科の鳥の分類や黒田長久氏の管鼻目（ミズナギドリ目）の系統分類がありました。記載的な分類の研究にあきたらなかった数人の若者たちは鳥獣生態研究会を作って会合を開いていました。これらとは別に大学でも徐々に鳥を研究する人たちが出て学会を担うようになりました。羽田健三氏（信州大学）はカモ類の群集を野外で研究しましたが、その教室からはエナガの群生活を追って上越教育大学で野外鳥学を確立した中村登流氏や日本で行動生態学の元祖となった山岸哲氏（大阪市立大学）を出しています。大学院生では後に国際的に第一線で活躍することになった小西正一氏（北海道大学）がオオヨシキリの一夫多妻の生活史を明らかにしたり、蠟山朋雄氏（東京大学）が巣箱の自動撮影装置を考案したりして大きな刺激になりました。その後の日本鳥学の目覚ましい発展ぶりはこの本に詳しく綴られていると思います。これからの 100 年も世界をリードするような研究が続けられて行くことを祈っています。